

現代日本の原型を学ぶ現代史のゼミ—「半楽半苦」の青春

柳沢 遊 経済学部 教授

本研究会では、第2次大戦後の日本社会・経済の諸側面に焦点をあてて、とくに「日本の高度成長」を、あれこれと調査しています。

高度成長期には、都市部にも工場が林立し、商店街の賑わいが遠くまで続き、路地裏では少年たちが金のかからない遊びに興じていました。大人たちも、映画館や百貨店の冷房が楽しみでした。もちろん、高度成長期にも、今日とは異なった「生活困難」があり、子供たちの争いも絶えませんでした。電車には行列をなして傷痍軍人が乗り込み、そういう光景を見ながら人々は、戦争の傷跡をいやすように働き続けました。

柳沢ゼミでは、「高度成長の時代」を中心軸として、三田祭発表や卒業論文執筆にむけた努力を教員をふくめて全員参加でおこないます。3年生は、占領期の婦人雑誌、クリーニング店の営業活動、米穀販売店の活動、日本ソソ連間の漁業交渉、ベトナムと日本の関係、カセットテープの流行の時代など、実に渋いテーマを選択して、これを三田祭論文、さらに卒業論文に仕上げ

いこうと、資料収集に全力投球していただきます。資料収集の現場は、図書館地下4階、国会図書館、お店での聞き取り、東京都立図書館とさまざまですが、9月の合宿の際に各自の研究成果が持ち寄られ、他大学の学生をまじえた白熱した討論が展開されます。ジャズから学生運動、オリンピック不況など、教科書に載っていない諸事件にも立体的に視野を広げ、ふつうの市民が営む生活や営業・遊びの断片から、「戦後の日本」「高度成長の時代」を多面的に問いなおすのです。

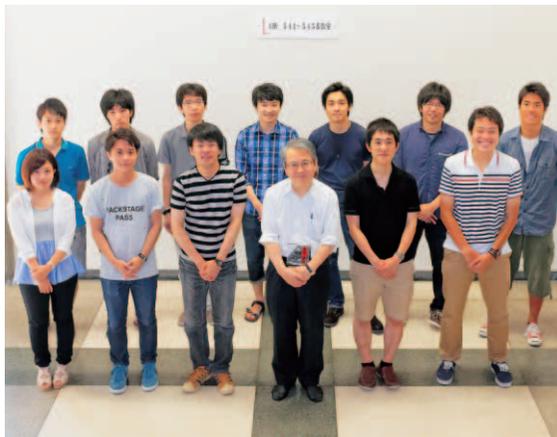
テキスト輪読、資料の収集、と忙しいゼミ生活ですが、学生たちは、それを半分楽しみ、半分苦しみもがいてゼミに結集します。「オンリーワンの作品」が仕上がる11月に3年生がひと仕事を終えた充実感にひたり、卒業研究が2月の「卒業論文報告会」に結実して、「悔いのない柳沢ゼミでの2年間」がおわるのです。

経済史にハマる！

よしひろなりふみ
吉弘成文君 経済学部3年

20年の伝統を持つ柳沢ゼミでは、高度経済成長期前後の日本の経済・社会現象をはじめとした幅広いテーマを経済史という視点から研究しています。1人1本の三田祭論文を仕上げ、懸賞論文やハイド賞論文にも積極的に応募するなど、2年間を通じて論文執筆に力を入れています。三田祭論文、卒業論文へ向けて、自分の関心に沿った、個性のかつ斬新なテーマの掘り下げ方について、先生やゼミ生同士でディスカッションを重ねながら研究活動を進め、輪読力、文章執筆力、文献調査力を日々養っていきます。

ゼミの人数は決して多くありませんが、先生は、思いやりとゼミ生相互の生活理解を含めて、「人間くさい学問」をめざしており、ゼミ内の雰囲気は、厳しさの中にも和やかさがあふれています。



いのち 生命ときずなの移植医療

先端医療である移植医療と小児看護をテーマに、広い視野を備えたナースになることを目指し、
研鑽を積んでいます。

添田英津子

看護医療学部 専任講師

移植医療が他の医療と異なる点は、移植を受けるには臓器提供者から臓器をいただかなければならないということとです。それは、移植が、人と人との関係で成り立つという感情的な医療であることを意味します。つまり、病気に苦しむ患者にとって、移植を受けるか受けないかという決断は、自らの「生命」を考へることだけでなく、人と人との「きずな」について考へることにもなるのです。患者は、いつ訪れるかわからない死を意識しながら、孤独に悩みます。

一方で、臓器提供者とそのご家族がいます。脳死ドナーのご家族は、愛する人の突然の死に直面しながらも、「誰かの生命が救われるのなら……」というまったくの善意によって臓器を提供なさいます。また、生体移植では、健康な方が、ご家族の命を救うために臓器を提供されるのです。

そのような状況の中で、患者やご家族は、自分を守るための多くのバリアを無意識のうちにまよっています。そ

のバリアを一枚一枚がしていくことが、私たち看護者の大事な役割です。優しい言葉をかけたり、怒ったり、叱ったり、冗談を言ったり。私は、そういう関わり方の裏づけにはソフトサイエンスがあり、バリアがはがれる瞬間には、何らかのからくりがあるのでないかと思っています。それらを国内外の文献から学び、目の前の現象を可視化していくのがこの研究会の目的です。

慶應義塾大学病院では、腎臓・肝臓・小腸の臓器移植を行っています。現在の肝移植は、1995年当時、一般消化器外科の北島政樹教授の先導でスタートし、今年で20年になります。腎移植は、約30年の歴史があります。学生たちは、カンファレンスや勉強会に参加し、多くの学びを得ています。

医学の進歩が目覚ましい中で、学生たちには、患者をきめ細かに見る感性を磨き、患者の良き見張り役となれるような奴隷（おとこ）の視点を持った、優しい看護者に成長してほしいと願っています。

※雁の群れの中で、周囲の状況を冷静に見守り自張り役。

移植医療を通して看護の力を磨く

原佑季君 看護医療学部 4年

添田ゼミでは、主に移植医療をテーマに研究をしています。移植医療では、手術を受ける時だけでなく、終わってからもずっと、医療従事者は患者さんとご家族に関わります。その関わりは医療の域を超えて、患者さんとご家族の人生に大きな影響を及ぼします。そのため移植コーディネーターをはじめとする移植に携わる者には、きめ細かに見る力と先進的な知識・技術を有していることが求められます。

添田先生は、明るく素直な人柄もさることながら、移植コーディネーターのエキスパートです。これからも勉学に励み、一人でも多くの患者さんに温かく高度な看護を提供していけるようになりたいと考えています。

